

森のともだち

文・たけうち すみこ

絵・うえもと いさむ





「おきなさい、おきなさい。春ですよ。」

やさしい声が聞こえてきます。

ブナのお母さんがブナの赤ちゃんを
おこしているのです。



その声によばれて、さいしょに目をさましたのは、ブナンでした。

「うーん、よーいしょ。」

ブナンは、お日さまの光を少しでも多くあびようと、
一生けんめい、せのびをしています。

「そうよ、ブナン。はっぱを広げなさい。お日さまの光は、あなたたちのごはんなの。
いっぱいあびて、早く大きくなりなさい。」

お母さんにはげまされて、ブナンは、ますますがんばります。



はる
春の森は、とてもにぎやか。

ふゆ
冬みんでいたどうぶつたちが、おき出してきます。

山さいをとりに、ふもとの村人もやってきます。

「お母さん、森がにぎやかで、なんだかうれしいね。」

「ほんとね。ここには、みんながあつまってくるの。

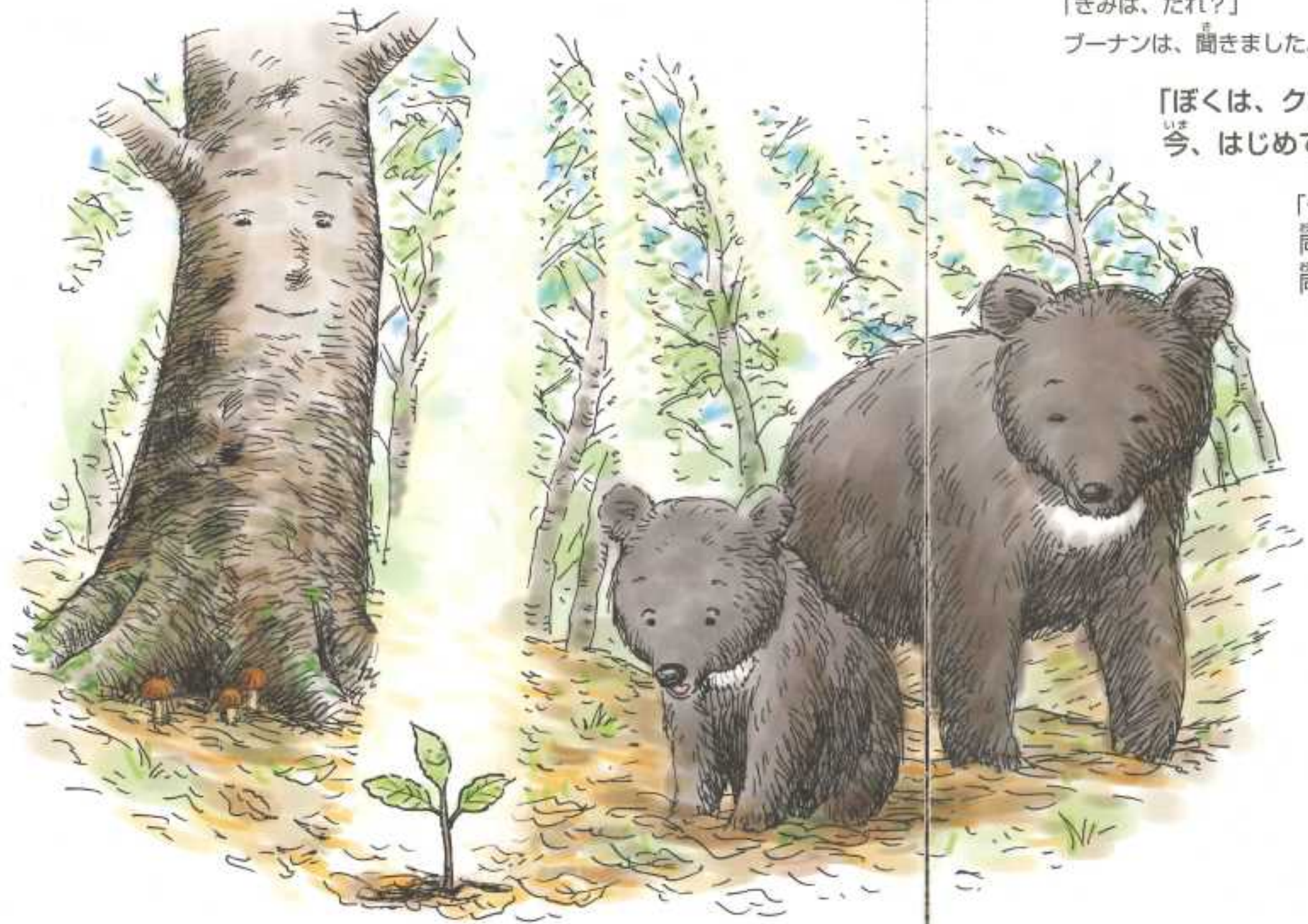
人もどうぶつも虫も。

コケやきのこやいろんなしよくぶつもよ。」

「へえ。どうして？」

「そのうち、あなたにも分かるわ。

ほら、だれか来たみたいよ。」



ほんとうだ！

冬みんからさめたばかりのクマの親子が、こっちにやってきます。

「きみは、だれ？」

ブーナンは、聞きました。

「ぼくは、クマのクータン。今年うまれたばかりなんだ。
今、はじめて外に出てきたんだよ。」

「そうか。ぼくも今年うまれたばかりなんだ。

同じだね。」

同じ年の二人は、すぐになかよくなりました。



夏。ブーナンは、ちょっとだけ、せがのびました。
でも、まわりの草や木の方が、
ずっとずっと早く大きくなります。
お日さまの光が、あびられなくて、
ブーナンは、だんだん元気がなくなってきました。

「ブーナン、がんばりなさい。
まわりの草のすき間からこぼれる
お日さまの光をひろうのよ。」

お母さんのはげます声が、だんだん遠くなります。



「おーい、ブーナン！ どこだぁ?!」

クータンの声です！

クータンが、草をかき分けてやってきました。

「だいじょうぶか？ 今、たすけてやるからな！」

クータンは、小さい体で、せの高い草たちに体当たり。

そして、ブーナンに日が当たるようにしてくれました。



「ありがとう、クータン！ ありがとう！」

ブーナンは、思い切りせのびをしました。

秋。森は赤や黄色に色づいて、だれかが絵のぐで絵をかいたみたい。
「お母さん、きれいだね。でも、何だか、みんないそがしそうだよ。」

「そうよ。冬が来る前に、たくさんごはんを
食べておかなければならないでしょ。
だから、みんな、いそがしいのよ。」





すると、遠くから、かさこそ、という音が近づいてきました。
野ネズミのズーです。

ズーは、ブーナンを見て、

「うーん。あんまりおいしそうじゃないけど、
食べられるかな？

おなかですいたから、食べてみようかな。」と言いました。

ズーが、大きな口をあけたその時！



クータンが、走^{はし}ってきました！

「だめだよ、だめだよ。
ぼくのともだちを食^たべないで！」

クータンは、ズーに体^{たい}当たり。
ズーは、びよこびよこにげていきました。



「ありがとう、クータン！ ありがとう！」

ブーナンは、あぶないところをたすかりました。
「でも、クータン、ぼくは、いつもきみにたすけてもらってばかりだね。
ぼくは、ともだちのきみに何^{なに}もしてあげられないんだ。」
ブーナンは、しょんぼりして言^いいました。すると、クータンは、
「なに言^いってるんだい。
どうしてこの森にみんなあつまってくるのか、知らないのかい？」



クータンは、お母さんに教えてもらった話を
ブーナンに教えてあげました。

「あと200年くらいたって、
ブーナンが、ブーナンのお母さんくらい
大きくなったらね、
森のまもりがみって、
言われるようになるんだって。」

ほら、この森の地めんはふかふかだよね。
それは、きみたちがおとしてくれたおちばが、
つもっているからなんだって。

おちばが、スポンジのように水を
ためてくれるから、
大雨がふっても、土がながれないし、
あちこちにわき水がわいてくるんだよ。」





「まだあるよ。」

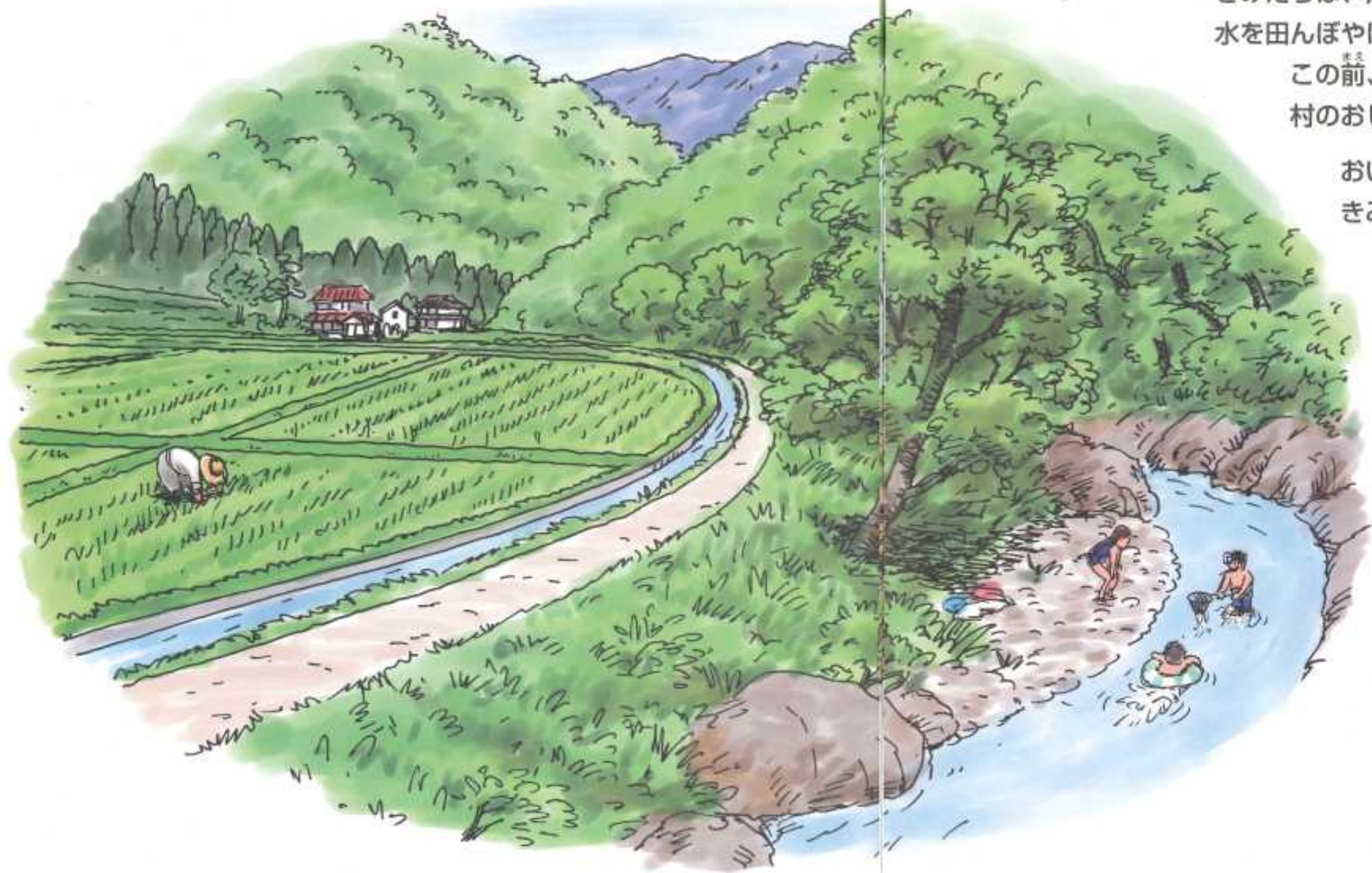
この森では、
空気がひんやりして、
しんこきゅうすると
気持ちいい！
それは、きみたちが
お日さまの力をもらって、
よごれた空気を
きれいにしてくれてる
からなんだって。」

「まだまだ、あるよ。」

きみたちは、川を^{とお}通してえいようたっぷりの
水を田んぼやはたけにおくってるんだって。

この前、山さいを^{まえ}とりにきたふもとの
村のおじさんが、そう^{ほんま}話してた。

おいしいお米^{こめ}ができるのも、
きみたちのおかげなんだってさ。」





ブーナンは、びっくりしましたが、
うれしくなって言いました。

「そうか。じゃあ、ぼく、早く大きくなるよ。
それで、クータンにおんがえしする！
それまで楽しみ^{たの}にまってるよ！」

クータンは、にっこりわらいました。



森に、はつ雪がふりました。

これからさむくてきびしいきせつが、はじまります。

クータンが、やってきて言いました。

「これから冬の間、ぼくらはおうちから出られないんだ。」

「そうか、冬みんするんだね。しばらくの間、おわかれだね。」

「ブーナン、元気でね。」

「うん、がんばるよ。クータンも元気でね。」



冬の森は、しんと、雪がふりつもり、
つめたい風が、びゅーびゅーと、ふきあれます。
でも、ブーナンは、じっとがまんして、
ふんばっています。



お日さまの光が、だんだんあたたかくなって、
やっと森に春が来ました。

「ブーナン、よくがんばったわね。
春が来たわよ。」

お母さんの声が、聞こえてきます。
そこに、ねぼけた顔をして、クータンが、
やってきて言いました。

「元気だったかい？ 冬はつらかっただろう？」

「へい気さ。
クータンは、まだねむそうだね。」

「うん。でもおなかがすいちゃったな。
いっぱいごはんを食べるぞー。」

「ぼくもお日さまをたくさんあびるぞー。」
冬をこして、

二人は、少したくましくなりました。



何回も何回も、こうしていっしょに春をむかえて、
クータンは、おじいちゃんクマに、
ブーナンは、わか木になりました。



そして、ある春。

クータンは、冬^{とう}みんしたままおきてきませんでした。

「お母^{かあ}さん、クータンがおきてこないよ。

どうしたんだろう？」

ブーナンは、なきながらお母^{かあ}さんに聞^ききました。

「ブーナン、わたしたちは何^{なん}百年も生きるのよ。

クータンたちは、どんなに長^{なが}生きしても20年くらい。

いつかおわかれしなくちゃいけないの。」

ブーナンは、なきじゃくりながら言^いいました。

「だってぼく、おんがえしするってやくそくしたんだ。

それなのに、まだ何^{なん}にもしてないんだ。

あんなにたすけてもらったのに。」

お母^{かあ}さんが、やさしく言^いいました。

「じゃあ、クータンにおんがえしできなかった分^{ぶん}は、

クータンの子どもや、またその子どもに

してあげなさい。

お母^{かあ}さんもそうしてきたのよ。」

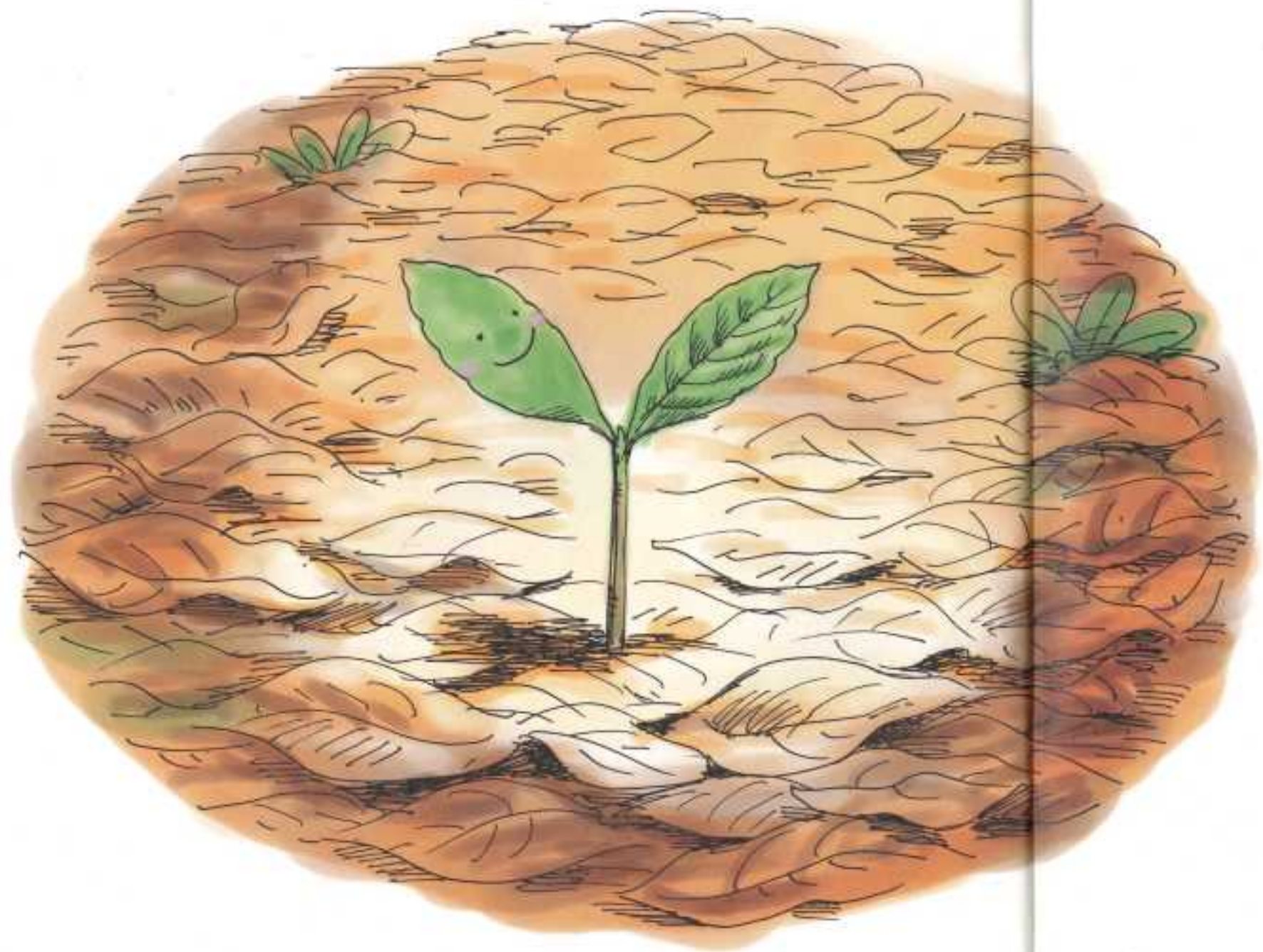


ブナンは、もうなきませんでした。

そして、何十回も何百回も、春をむかえて、
とてもりっぱな木になりました。

みんなが、そのまわりにあつまってきて、こう言います。

「ブナのじいじ！ブナのじいじ！
ブナンじいじは、まもりがみ！」



ほら。今年も雪がとけはじめると、
ブーナンじいじのあの声が聞こえてきますよ。

「おーい、春だぞー。
おきろ おきろー。」

その声によばれて、またたくさんのブナの赤ちゃんが、
目をさまします。

そして、大きくなっていくよ、

森のなか間たちといっしょにね。

あついから日かげに行こう、さむいから家に入ろう、
みなさんは体をうごかして、かんきょうのへんかに
たいおうできますね。

でも、森の木ぎはどうでしょう。うごけませんね。
うごけないから、一生けんめい、その場で生きる知えを
はたらかせているのです。

このようにして考えてみると、わたしたちが、ブナの木、
ブナの森をまもり、そしてそだててあげなければいけない
ことが分かりますね。

発行日 2001年2月1日 第1版
2010年7月15日 第7版

文 竹内鈍子 (たけうち・すみこ) 東京電力(株)環境部
平成6年東京電力株式会社入社。
平成11年7月同社初の人材公募に応募し、東京電力の所有地
である尾瀬の自然保護活動を担当する。
平成21年10月より地球温暖化問題の国際交渉業務も担務
しつつ、永年尾瀬保護活動担当として、尾瀬をきっかけとした
環境教育等の活動に継続して取り組んでいる。

絵 植本 勇 (うえもと・いさむ)
1969年広島県生まれ。1987年日本大学芸術学部美術
学科卒業。
広告制作会社を経てフリーのイラストレーターになる。
主に広告、雑誌などのイラストをほぼひろいタッチで描く。

監修者 森川 靖 (もりかわ・やすし) 早稲田大学人間科学部教授

発行者 東京電力株式会社
〒100-0011 東京都千代田区千代田1-1-3

電話 03-6373-1111 (代表)

編集 東京電力株式会社 環境部

印刷・製本 大日本印刷株式会社